

VII. BECC 2008/2009 学年末評価報告

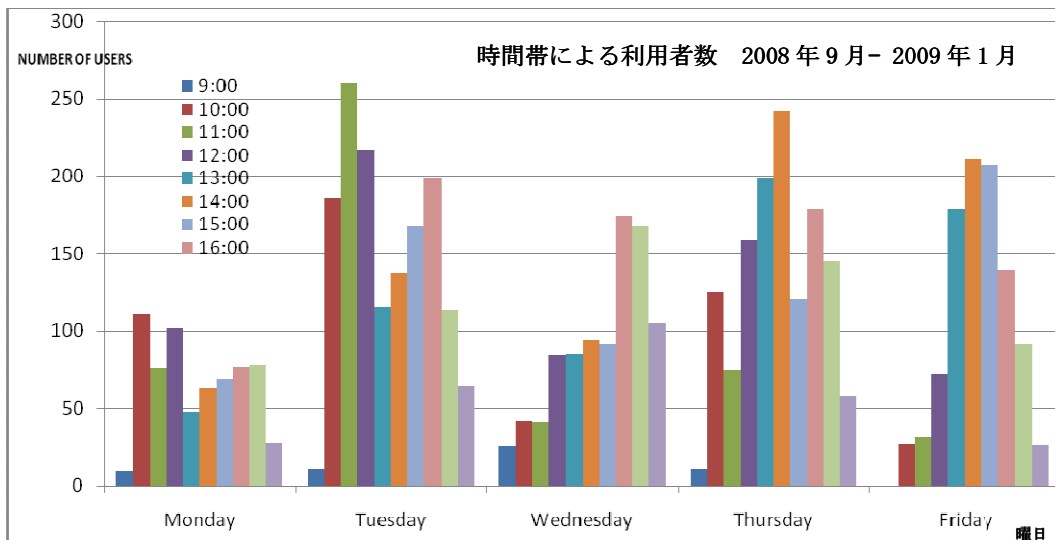
A. はじめに

文教イングリッシュ・コミュニケーション・センター (BECC) は 2008 年 4 月に開設 (授業及びカリキュラム企画)され、同年 9 月に文教 SALC が開設された。本報告書の目的は SALC とカリキュラムのそれぞれを概観するとともに、本計画に成功をもたらした要因は何か、その鍵となるデータを解説しつつ、2009/2010 学年度に向けた留意点を探ることにある。本報告書は文教 SALC の紹介から始まり、続いてカリキュラムと授業に焦点を当て、さらに 2008/2009 学年度に BECC で使用した教材と研究活動について議論する。最後に、スタッフと 2009 年度に予定されている企画について概観して、本報告書の結論を述べる。

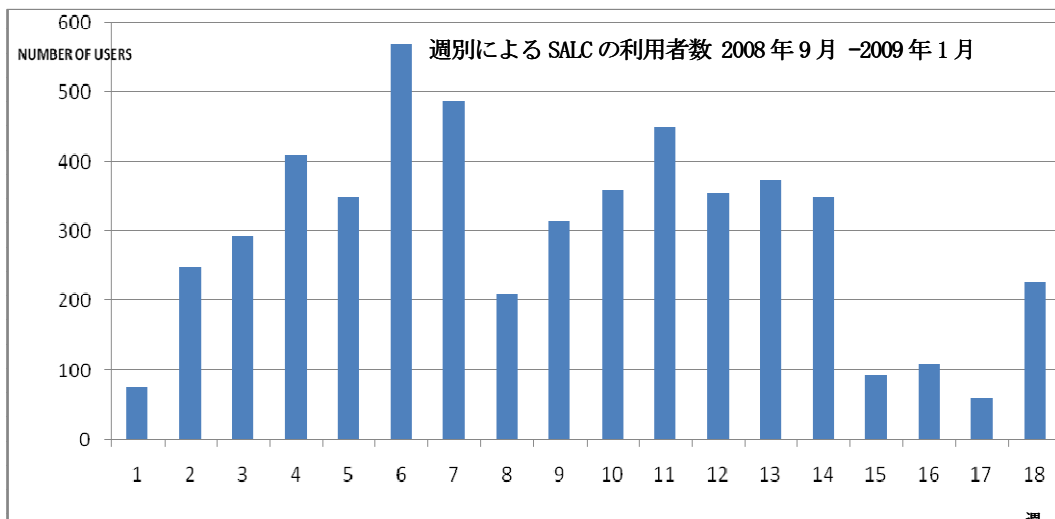
B. SALC

1. SALC 利用者データ* *(例外を除いて、下記の数字は 2008 年 9 月 9 日から 2009 年 1 月 23 日までを対象とする)

SALC の利用は学生たちのスケジュールを反映している。自由時間のある時に施設を利用する傾向が見られる。後期におけるピーク時は、スケジュールの合間の時間が空いた時に最も利用度が伸びている。



SALC の利用者数が最も高くなった時期は学生のレポート提出期限日と一致している。提出期限が過ぎると、一般的に利用者数は減少する。



学生たちのハードなスケジュールを鑑みれば、SALC の利用は全体的に見て満足のいくものであった。BECC のカリキュラムと SALC 活動を一体化したことで、センターの利用者が大幅に増加したことは明白だが、授業内容に関係なく頻繁に SALC を利用するようになった学生たちもいる。

月別による SALC 利用者数					
08年9月	08年10月	08年11月	08年12月	08年1月	合計
621	1819	1335	1171	396	5342

SALC で行われた授業は、学生たちがセンターの役割を理解し、利用できる施設や教材を知り、授業にどのような自主学習を取り入れることが出来るかということを知るのに重要な役割を果たした。

SALC で行われた月別による授業数					
08年9月	08年10月	08年11月	08年12月	08年1月	合計
8	4	2	1	5	20

2. 貸出データ

SALC の教材は広く学生たちに利用されている。後期の学生による貸出記録は 996 件であり、その学科と学年別データを以下に示す。予想されたように、最も頻繁に利用したのは 1 年生であり、新年度には、新入生をむかえて、1 年生、2 年生共にさらに貸出件数が増えるものと期待される。

学科別による貸出件数	
初等教育学科:	396
人間言語学科:	143
人間栄養学科:	203
心理学科:	94
人間福祉学科:	130
附属高校:	30
合計	996

学年度別による貸出件数 (高校生は除外)	
大学 1 年生:	731
2 年生:	135
3 年生:	62
4 年生:	38
合計	966

学科及び学年度別貸出件数	
大学 1 年生	
初等教育	341
人間言語	77
人間栄養	166
心理	71
人間福祉	88

大学 2 年生	
初等教育	43
人間言語	44
人間栄養	1
心理	18
人間福祉	40

大学 3 年生	
初等教育	5
人間言語	22
人間栄養	43
心理	0
人間福祉	0

大学 4 年生	
初等教育	14
人間言語	17
人間栄養	0
心理	5
人間福祉	5

3. 学習指導と教育サービス

a. 正規の指導セッション

予約制の指導セッションは SALC が 9 月に公式に開設される前、前期に開始され、後期を通して継続された。時間は平均して約 1 時間である。

前期 – 正規の指導セッション数 32

後期 – 正規の指導セッション数 78

ラーニングアドバイザーは SALC 活動を実施していく上で、これらの指導セッションの他にも、頻繁にインフォーマルに教育上のアドバイスを与えている。内容的には正規のセッションを行うのと同様の時間が求められるものとなっている。ラーニングアドバイザーは SALC での授業にもアドバイスを行い、他の教員スタッフと同じベースで SALC のラウンジ業務にも参加している。

将来的にはこの指導サービスをより頻繁に促進するとともに、このサービスがより広く学生たちに知られるよう、より多くの努力が求められる。

b. SALC ワークショップ

後期に多くの SALC ワークショップが計画されたが、興味ある学生が十分に集まらなかったことで実際に行われたのは 2 回である。参加した学生からは圧倒的に肯定的な評価だった。

開催されたワークショップ数: 2

参加者合計: 8

ワークショップの参加者が集まらなかった理由としては、学生たちのハードスケジュール、ワークショップの目的と内容が広く理解されなかったこと、トピックが文教の学生の興味を引かなかったことなどがその要因として挙げられる。

新年度に向けてより多くの学生がこれらの活動に参加するように、学生たちのアイデアをワークショップのトピックに反映すること、ワークショップの再ブランド化、名称の変更、スケジュールの再調整、より効果的な宣伝と促進などを含めて、この問題に取り組みつづける。

4. 教材の購入と開発

SALC の教材選択に際しては、文教の学生たちに、ラーニングアドバイザーや他の SALC スタッフのサポートを受けつつ自主語学学習の最高の選択肢が提供されることを念頭に置いた。学年度を通して教材の数が増え、カリキュラムの内容に直接関係するセクションを設けるまでに至った。

a. 収蔵教材

現在 SALC から貸出可能な教材には以下のものがある。

ボイスレコーダー	5
ヘッドホン	16
ビデオカメラ	5
カードリーダー	5
スプリッター	8
SD カード	5
マック・コンピューター	7
ワークシート	510
音楽 CD	141
CD ロム	2
DVD	101
ゲーム	6
本(CD 付きの本も含める)	1137
CD ロム付きの本	21
DVD 付きの本	6
雑誌	27

学生のニーズと大学側の要求に準じて、収蔵教材の数は 2009 年度さらに増加するだろう。ケイレブ・フォールが引き続き教材及び機器の責任担当を務める。

b. SALC 課外活動の開発

ヘーミッシュ・ギリースは SALC のスタッフ及びラーニングアドバイザーと共に、BECC のカリキュラムと自主学習活動を連携する一連の業務に従事している。この活動は多くの学生が同時に活動を行えるようにするため十分な教材を備えることで支えられている。1 学年及び 2 学年のシラバスのための活動が開発された。教員、スタッフ、ラーニングアドバイザーは事務局と協力してこれらの活動をモニターし支援してきたが、2009 年度も引き続き協調していく。

c. SALC のオリジナル教材の開発

小館梓（ラーニングアドバイザー）は映画を使った語学学習のサポート教材の開発と購入を担当している。これらのオリジナル教材は現在 SALC の 2 年生用課外活動の一環として使用されている。現在彼女は音楽を通して語学学習を促進する一連の教材の開発にも取り組んでいる。2009 年度はさらなる開発に取り組むと共に、漫画を使って語学学習を補助する教材作成に着手する。ルーク・カーソンが新しい SALC 教材の開発に加わることになる。

d. SALC ウェブサイト/ユーザー・ガイド

ケイレブは学生たちが校内で利用できる SALC ウェブサイトを開設した。今期、学生たちが SALC をよりよく理解し使えるようにするためにユーザー・ガイドとなる教材の

改訂版の作成に当たっている。オリジナルは英語版のみだが、改訂版は日本語と英語版で作成され、文教の学生が施設を利用する際のガイドとする。新学年度が始まる前にオンラインでも利用可能となるよう期待するところである。2009年にはSALCとその利用サービスに関する情報提供の中心となるであろう。

5. スタッフと育成

学生スタッフ

飯田桃子と西岡陽子が学生スタッフの育成と指導を担当している。

飯田の主な業務は学生がSALCの新しい教材を棚に上げるまでの一連のプロセス(カバーかけ、分類、ラベル貼り)をこなせるように指導することである。西岡と飯田は共に、学生を対象にSALCにおける学生スタッフの役割と重要性、及び高度な顧客サービスの必要性に焦点をあてた訓練を実施している。

この訓練は2009年度まで継続し、1回目のセッションは前期の早い時期に予定されている。新採用のアルバイトスタッフはSALCの先輩学生たちからSALCプロセス業務の指導を受けることになる。

C. カリキュラム

1. 2008/2009 後期の授業評価

BECCの全教員は学生評価とフィードバックの一環としてコースの評価を終えた。この評価の一環として、教員は後期の公式の教授評価報告に採用するクラスを1つ選ぶように求められ、そのクラスで実施された13の“教える”ことに焦点を当てた質問の結果が公式な目的のために使用された。

各教員の質問項目別平均評価

	ジーン・ トンプソン	リー・アト キンソン	ヘミッシコ ギリース	ジャック・ パウワー
The teacher was on time for lessons 教員は授業に遅刻しなかった	3.8	4	3.3	3.7
The teacher was well prepared for lessons 教員は授業の(準備)プランを良く組んできていたと思う	3.5	3.8	3	3.6
I could understand the teacher's instructions 私は教員の説明、指示を理解することができた	2.9	3.1	2.6	3.3
The teacher was enthusiastic in teaching 教員は熱心に指導していた	3.7	3.9	3.5	3.8
The teacher was approachable and available to provide help during lessons 授業中教員にアプローチ(質問)しやすく、また手助けをしてくれた	3.5	3.9	3.4	3.6
The teacher was approachable and available to provide help outside lessons 授業以外でも教員にアプローチ(質問)しやすく、また手助けをしてくれた	3.3	3.9	3	3.3
The teacher responded well to questions and comments 教員は質問やコメントなどに丁寧に対応してくれた	3.5	3.8	3.5	3.6
The presentation of materials (materials, lecture style, visual aids) was appropriate 教員は教材やプロジェクターなどを適切に使い授業を行った	3.6	3.7	3.3	3.7
The teacher created motivation and interest in the lesson 教員は私達にモチベーションを持たせるような興味深いレッスンを作った	3.3	3.6	3.2	3.2
The teacher was fair to all the students 教員は全ての学生に対して平等であった	3.5	3.7	3.3	3.8
Appropriate action was taken against late or disruptive students 教員は遅刻した学生や授業を乱す学生たちにしかるべき適切な態度を示していた	3.3	3.1	3.1	3.1
The time allocation of class activities was appropriate クラスアクティビティーの時間配分は適当なものであった	3.2	3.3	3.0	3.2

The teacher gave sufficient feedback during class/about homework assignments 教員は課題などの提出物に対する効果的なフィードバック（振り返り）を授業内で行っていた	2.8	3	3.0	2.8
Overall, the teacher created a good environment for learning English 総合的に判断し、教員は英語を学びやすい快適な環境づくりを行っていた	3.5	3.75	3.2	3.5

論考:

総論として、2008/2009 学年度における BECC の教員スタッフに対する満足度は高いから非常に高いという評価を得た。その他提起された留意点として：

- 明確な情報の伝達(話すスピード、指示の難しさ、指示の確認)
- 宿題や与えられた課題のフィードバックに対しては、より突っ込んだ努力が必要

2. 2008/2009 2 学期コースの学生評価

BECC の学生は全員、彼らが受講したコース、教員、授業のやり方、カリキュラム、目標達成度やコースの目的に関するフィードバックを提出する機会が与えられた。

このセクションでは、コースと評価調査の結果について紹介する。以下に、その結果の分類法を示す。

評価分類			
平均点 2.5 以下	平均点 2.5 ～ 3	平均点 3 ～ 3.5	平均点 3.5 以上
回答者の 90% 以上が「同意しない、あるいは、全く同意しない」と回答	回答者の 67% 以上が「同意しない、あるいは、全く同意しない」と回答	回答者の 67% 以上が「同意する、または、強く同意する」と回答	回答者の 90% 以上が「同意する、または、強く同意する」と回答

注意を喚起したいあるいは対応策が要求される分野(黄色と赤)には、問題に対処するための簡単な説明と行動計画を示す。

大学 1 年生の英語調査結果総論

* 1 年生の英語は英語によるコミュニケーションとワークショップの合同授業になっている。

調査は 46 の質問項目から成っている（本報告書では 42 の項目について概観する）。

調査に回答した学生数は 261 名である。無記名調査で、質問 1 から 4 は学生を分類するための質問で、それらは、学科、学年、クラス番号、そして教員名である。

質問 5 から 42 は、コース、教え方、カリキュラムに関する質問で、リッカート尺度を採用し、その採点法は以下の通りである。以下は学生に示された説明文である。

次の 1～4 の中から該当するものにしるしをつけなさい。1 は強く否定するを意味し、4 は強く共感するを意味します。

調査を見直す際の総合的観点として、リッカート尺度の使用と説明の仕方が挙げられる。学生から得た個々の事例では、それが最も「良い」として自動的に 1 を選んだと思われる点が見られる。

	優秀な結果
--	-------

10	The teacher was on time for lessons	教員は授業に遅刻しなかった
13	The teacher was enthusiastic in teaching	教員は熱心に指導していた
14	The teacher was approachable and available to provide help during lessons	授業中教員にアプローチ（質問）しやすく、また手助けをしてくれた
16	The teacher responded well to questions and comments	教員は質問やコメントなどに丁寧に対応してくれた
17	The presentation of materials (materials, lecture style, visual aids) was appropriate	教員は教材やプロジェクターなどを適切に使い授業を行った
24	There were sufficient opportunities to use English in class	授業の中で英語を使う機会が十分にあった。

論考:

BECC の専任講師たちが学生から高く評価されていること、学生たちが授業の進め方に満足し、1年生の英語カリキュラムに基づいて英語を使用することに大いに満足していることは明らかである。

	満足のいく結果
--	---------

11	The teacher was well prepared for lessons	教員は授業の（準備）プランを良く組んできていたと思う
12	I could understand the teacher's instructions	私は教員の説明、指示を理解することができた
15	The teacher was approachable and available to provide help outside lessons	授業以外でも教員にアプローチ（質問）しやすく、また手助けをしてくれた
18	The teacher created motivation and interest in the lesson	教員は私達にモチベーションを持たせるような興味深いレッスンを作った
19	The teacher was fair to all the students	教員は全ての学生に対して平等であった
20	Appropriate action was taken against late or disruptive students	教員は遅刻した学生や授業を乱す学生たちにしかるべき適切な態度を示していた
21	The time allocation of class activities was appropriate	クラスアクティビティーの時間配分は適当なものであった
22	The teacher gave sufficient feedback during class/about homework assignments	教員は課題などの提出物に対して十分なフィードバック（振り返り）を授業内で行っていた
23	Overall, the teacher created a good environment for learning English	総合的に判断し、教員は英語を学びやすい快適な環境づくりを行っていた
25	My ability to communicate using spoken English in different situations has improved	様々な状況の中で、（英語を使った）コミュニケーション能力が上達した
26	My ability to have a conversation in English has improved	英会話能力が上達した
27	My ability to have a discussion in English has improved	英語でのディスカッション能力が上達した
28	My ability to understand spoken English has improved	人が話している英語を理解する力が上達した
30	My ability to give presentations in English has improved	英語でのプレゼンテーション能力が身に付いた
34	My understanding of other cultures has increased	異文化に関する理解が深まった
35	My ability to work in a team has improved	チームワーク（チームで働く）力が身に付いた
41	The class encouraged me to get to know my classmates and teacher	この授業は私をクラスメートや教員とつながりを持つきっかけ作りとなってくれた

42	My motivation to study English has increased	英語を学ぶモチベーション（意欲）が上がった
----	--	-----------------------

論考:

教え方全般、またカリキュラムに関する質問はほとんど「緑」に分類され、学生たちの話し言葉による英語でのやり取り（カリキュラムの総合目標）は、明らかに進歩を遂げている。さらに、チームワーク、意欲、異文化理解・認識、人とのつながりの構築といった付随的目標にも成果を挙げている。

	注意が必要とされる項目
--	-------------

5	The course objectives and information about the course was stated clearly, and I was given clear handouts with information about the course	この BECC 英語コースの目的や情報などははっきりとわかりやすく示され、また文面にてコース内容の情報を私は知ることが出来た
9	I'm satisfied with this course	この英語学習コースに満足している
31	My confidence to give presentations in English has improved	英語でのプレゼンテーションをする自信がついてきた
32	My English vocabulary has improved	英語の語彙力が増えた
33	I know more useful phrases in English	役立つ英語のフレーズを（以前より）良く知っている
37	I feel more comfortable using computers in English to make presentations and use the internet	プレゼンテーションの作成や、インターネットを使う際に英語を使うことに違和感を感じなくなってきた
39	My ability to make English sentences has improved (e.g. questions, statements, paragraphs)	英語で文章を考える能力が（以前よりも）身に着いた（質問文、文の配置、段落分けなど）
40	The amount of homework for this class was appropriate	宿題の量はちょうどよかった

論考:

質問 40 の評価が低くなった点については翻訳の問題が考えられ、また学生自身、宿題に関して高い満足度のいく評価をするとは期待できないことも考慮される。質問 31 と 37 は学生たちの個人的な認識に基づくもので、学生たちは学習の成果を過小評価する傾向があり、プレゼンテーション能力（質問 30）が上達したと報告する一方で、“自信”はついていないと報告している。この観点から調査方法の修正が必要となるかも知れない。

最も失望的な結果となったのはコースに対する満足度であった。大多数の学生が明らかにコースに満足して（60%）いるものの、39%が同意しない、またはまったく同意しない（全く同意しない回答は6%）と答えている。コース全般の評価を上げることが2009年度の大きな課題である。2008年の1学年の英語コースに関しては、教員たちが教材やコースのフォーマット、さらにコース期間中に評価方式さえも改変しようとして急激に変更しようとしたことも、ある程度影響したと考えられる。その結果、学生たちはコース全般、宿題、フィードバックや目標を十分に理解できなかったと報告することになった。これらは現在作成中の新しいカリキュラムに示唆を与えるものであり、また2009年度に努力を傾注すべき点を明確に示している。

留意点:

- コース全般の構成、宿題、学習情報が学生たちに明確に伝わること、
- 自分たちが何をしているのか、なぜしているのか、学生たちに認識させること、また学年度中にコースを変更しないこと
- バイリンガル方式で明確に（かつ一貫した）コース情報を学生たちに提供（インターネット及び授業を通して）し、“学習契約”を採用して、学生が情報を受け取ったこと、ク

ラスの授業のやり方に同意し、教員に質問をする機会が与えられたことを証明するよう学生に要求する

- 質問 40 を書き換えて、ポートフォリオ・システムがどのように機能しているか（試験はなし）をよく理解し、その上での判断が反映されるようにする
- 質問 31 と 37 を見直し、認識ではなく“能力”を測るようにする
- 質問 32 と 33 を書き換えて 1 つの質問とする(紛らわしい)
- 1 学年と 2 学年のカリキュラムに語彙とライティングがどのように組み込まれているかを見直す

	対応策が必要な項目
--	-----------

6	I was able to understand the objectives and information about the course easily	私はこの BECC 英語コースの目的や情報を簡単に理解できた
7	I feel that I have achieved the objectives outlined in the syllabus	私はこのコース目標をおおむね達成できたと思う
8	The course was easy to follow	この英語学習コースは簡単だった
29	My ability to write in English has improved.	英語を書く力が（以前より）身に着いた
36	My leadership ability to plan and organize a project has improved	プランを作り、プロジェクトをまとめるリーダーシップ能力が身に着いた
38	I can better control and organize my own learning	自立学習（自分自身で行う学習）を計画立てできるようになってきた

論考:

コース情報はより明確で透明性の高いものにしなければならない。質問 8 と 38 が低い評価となったのは、翻訳の問題も考えられる。学生は明らかにライティングの上達を望んでおり、1 学年と 2 学年の英語コースの教材デザインチームはライティングをどのように取り入れていくか考慮する必要がある。プレゼンテーションと企画のリーダーシップと計画の対策として SALC のワークショップが推薦される。このアプローチは質問 38 にも提案される。しかしながら、学生たちは学習の現段階ではこの点に関する自己評価をマイナスとするかもしれないが、BECC のカリキュラムに沿って上達するにつれ、さらに SALC を頻繁に利用するようになれば、自主学習の進歩に役立つだろう。

対応策:

- バイリンガル方式で明確に（かつ一貫した）コース情報を学生たちに提供し、“学習契約”を採用して、学生が情報を受け取ったこと、授業の進め方に同意し、教員に質問をする機会が与えられたことを証明するよう、学生に要求する
- カリキュラム(たとえば各授業の初めに説明する、教室内の教材の紹介)に、各授業において達成されるスキルや目標を組み入れる
- 質問 8 を書き換えて、コースを評価すると言うよりもむしろコースを“フォローする”ようにする
- 質問 38 を書き換えて、授業で学ぶということの意味を含め、コントロールする、計画するとはどういうことか例を挙げて示すようにする
- 企画、プレゼンテーションの計画、管理、及びリーダーシップに関する SALC ワークショップ
- 1 学年と 2 学年の教材チームが行う調査をもとに、より多くのライティングを教材に取り入れる
- 語学学習の計画と構成に関する SALC のワークショップ

D. 調査と教材デザイン

1. はじめに

このセクションの目的は 2008/2009 学年度に BECC の教員及びラーニングアドバイザーチームの各メンバーが行った調査と教材活動を概観することである。

真新しいセンター、カリキュラム、そして SALC を目の前にして、本学年度の主題は教材のデザインと作成であった。2008/2009 年度に教員は教材のデザインと広報活動のために週 2 コマが当てられ（すなわち、コンタクト・コマは週 6 コマのみ）で、前期には SALC ラウンジでの担当業務はなく、カリキュラムと教材開発に多大なエネルギーを注ぐことが出来た。

2. BECC 教材と調査、その個人活動の要約

(各スタッフメンバーがそれぞれに提出)

a. ジーン・トンプソン

2008 年、ジーンは 1 学年の英語コース（カリキュラム作成、音楽ユニット、プレゼンテーション授業）と、2 学年の英語コース（プレゼンテーション授業、カリキュラム作成）用の教材の改訂と編纂にあたった。

ジーンは二つの論文を脱稿し、これらは出版される運びとなった。タイトルは：“Reevaluating the Test Specifications of an Oral Proficiency Test”（邦題；口頭実力テストのテスト方式の再評価）（*Kanda University of International Studies Journal* 版、近刊）、及び、ケイレブ・フォールとの共著となる “Adapting the BEPP Model: An Introduction to the BECC Curriculum Project”（邦題；BEPP モデルの採択：BECC カリキュラム企画への紹介）（*Studies in Linguistics and Language Education of the Research Institute of Language Studies and Language Education* 版、近刊）である。

“Reevaluating the Test Specifications of an Oral Proficiency Test” は、テスト方式再評価への理論に基づくアプローチと神田英語実力テスト（KEPT）の口頭サブテストの構成の再定義を概観し議論している。“Adapting the BEPP Model: An Introduction to the BECC Curriculum Project”（BEPP モデルの採択：BECC カリキュラム企画への紹介）では BECC カリキュラムと BECC の自主学習センター（SALC）の理論的基盤と実践的構成を説明し敷衍している。

ジーンはまた東京で開催された 2008 年度の JALT 会議でポスター・プレゼンテーションに参加した。タイトルは “Working Towards a Total Learning Environment（トータルな学習環境への道程）” で、BECC 企画の様々な側面を紹介した。

b. ケイレブ・フォール

2008 年、ケイレブは SALC の教材及び機器の発注や購入を担当した。加えて、飯田桃子と共に SALC の業務制度の開発と実施を、そして小館梓と共に SALC オリジナル教材の作成に従事した。また、SALC の 2 度目のオンラインコンテンツの開発を担当し、それらは 2009 年度の前期が開始されるまでには完成の予定である。

ケイレブは 2008 年度に調査関連報告書を 2 部書き上げた。その 1 つは、ジーン・トンプソンとの共著で、“Adapting the BEPP model: An introduction to the BECC curriculum project（邦題 BEPP モデルの採択：BECC カリキュラム企画の紹介）”として、雑誌 *Studies in Linguistics and Language Education of the Research Institute of Language Studies and Language Education* に紹介された。もう 1 つは学習者の信念に関する調査で、その成果は “Half full or half empty?（半分ある、それとも半分からっぽ？）” というタイトルで、ヘーミッシュ・ギリースと共に JALT 会議での発表につながった。また、JALT でポスター・プレゼンテーションにもチームとして参加した。

c. ヘーミッシュ・ギリース

1 年間、ヘーミッシュはジャックと共同で、日本、旅行と人間関係のレッスンユニットを大幅に変更した。変更されたものには学生のための足場を支える言葉、新しい語彙を増

やす活動、デモビデオの作成、2ヶ国語によるサポート、そして単語用フラッシュカードの製作がある。

学期が開始した時に、ヘーミッシュは新しいブログを立ち上げ、G カストで音声ファイルをアップロードして、1 学年用コースのためのリスニング活動を掲載した；さらに手引書を作成して、他の教員がこの技術を使用できるように計らった。前期に、彼は SALC の一連の課外活動を計画、開発して SALC の 1 学年のカリキュラムに組み込んだが、各セットはカリキュラムの各ユニットのテーマと連動していて、SALC の資源を使用し、語彙と文法同様、主にスピーキングとリスニング能力に焦点を当てている；合計 36 の 30 分練習活動が作成された。

さらに、彼は学生のために活動を紹介するための説明文書を書き、教員と学習アドバイザー用にエクセルデータベースを作成した。これらの活動は後期から開始された。

ヘーミッシュとジャックはフラッシュカードとパワーポイントを使ったスライドショーを採用した BECC の PR レッソンを 6 部作成し、また、BBCC のオープン・キャンパス・デー用の一連の特別教材も製作した。

後期には、ヘーミッシュは 2 学年用の新しいカリキュラムに 14 のレッスンを作成した：問題解決用のレッスンは 5 つ、ディスカッション能力のレッスン 4 つ、そして 2 学年のカリキュラムのテーマユニットの 5 つに関連した SALC の課外活動の 5 つのセット；その過程において、ラミネート版フラッシュカードの作成と同様に、音声とビデオ教材の作成にも当たった。

さらに、レッスンデザインの過程で、リーとジャックを加えてワークショップするために定期的にミーティングを開き、レッスンに対するフィードバックのやり取りをして、レッスンの再設計に従事してきた。

ジャックとリーと共に働きながら、ヘーミッシュは 1 年生用のオリエンテーション・ユニットの全面的な書き直しにも貢献した。そのユニットはイントロダクション・ユニットとして新しくなった。ヘーミッシュはこのユニットのために 4 つのレッスンをデザイン、または改良した。

加えて、ヘーミッシュは他の教員と共に語彙リストを作成し、各ユニット用の語彙テストをデザイン、実施した。

教材開発に多くの時間を割きながらも、ヘーミッシュはさらに研究活動も行った。1 学期には、サーベイモンキーを使用し、BECC の 1 年生のニーズ分析調査を研究し、デザインし、実施した。さらに本調査書を書きあげたが、2009 年後半に HBJD のワーキングペーパー誌に掲載される運びとなった。後期にはケイレブと共同で、語学学習に関する学生の信念を調査し、BALLLI 調査の複製を研究、デザイン、実施した。その後、ケイレブとヘーミッシュは東京で開催された 2008 年度の JALT 会議で本調査に関する発表を行った。同じ会議で、ヘーミッシュは BECC のポスター・プレゼンテーションに協力して、この革新的なプロジェクトの説明を行った。

その他の出版物としては、KUIS ELI のメンバーであるクリス・スティルウェルと共同で執筆した章が、新しい TESOL 教室実践シリーズの教室管理の本に掲載された。その章のタイトルは：‘*Language, Cameras, Reaction: Raising Awareness of First and Second Language Choices Through Documentary Filmmaking*’ (邦題：言語、カメラ、反応：ドキュメンタリー映画制作から第 1 及び第 2 言語を選択する意識を高める) である。また BECC 広島での企画に参加した時の経験について書いた記事は、KUIS Peerspectives 誌 2009 年冬号に ‘*From Makuhari to Hiroshima: A Teacher’s Perspective*’ (邦題：幕張から広島へ：ある教師の視点) というタイトルで掲載された。

d. ジャック・バウワー

ジャックは 2008/9 年、BECC の 1 年生の英語教材の保管、評価、改良を担当しており、その業務過程を基に調査することを決心した。ジャックはカリキュラムに関するデータを集めるためにカリキュラムを議題とした教員のミーティングの内容を録音し、またカリキュラムに関する学生のフィードバックを得るためのアンケートを作成した。調査は学年度

末に 261 人の 1 年生を対象に行われた。ジャックはこの研究の最初の調査報告書の草案を練り、2009 年に文教調査報告書に提出する予定である。

2008 年にジャックは神田大学とオーストラリアの西シドニー大学で同時進行で行われた語学学習企画授業について福岡で開催されたワールドコールドプレゼンテーションを行った。さらに、2008 年に東京で開催された JALT 会議で BECC の教員及び学習アドバイザーと共にグループによるポスター・プレゼンテーションに参加した。

ジャックはまた 1 学年のオリエンテーション・ユニットを完全に改訂し、名称もイントロダクション・ユニットと変更した。リー、ヘーミッシュ、そしてジャックは各々にこのユニットの 3 つのレッスンをデザイン、または改良した。ジャックはまたイントロダクション・ユニットに新しい企画、ユニットの終わり (end of unit) を作成した。さらに、他の教員たちと共に 1 年生の英語のための語彙テストを作成、実施した。

ジャックはテストを実施し答案を採点する有益なソフトウェアを発見した。そのソフトウェアを使用すれば紙は不要となり、学生たちはパソコン上でテストを受けることが出来るようになった。また、自動的に採点され、教員が採点をする必要がなくなった。ジャックはリーとヘーミッシュと共に、1 年生の英語用ユニットのための語彙リストとテストを作成した。

ジャックはヘーミッシュと緊密に作業をして、日本、旅行、人間関係ユニットのほとんどのレッスンにも手を加えた。学生のための足場を支える言葉、新しい語彙を増やす活動、デモビデオの制作、2 ヶ国語によるサポートと語彙用のフラッシュカードの製作など、修正された。ジャックとヘーミッシュはまた、フラッシュカードとパワーポイントのスライドショーを含めて、BECC の広報レッスンを 6 部作成した。

e. リー・アトキンソン

リーは 2 年生の英語カリキュラムのデザインと作成を担当した。この目的のために、彼女は教育、社会、健康、広告と学習という 5 つのテーマに沿ったユニットと、これらのユニットの大半のレッスンを作成した。またユニットに伴うシラバス、カリキュラムと評価文書を、さらに各ユニットの頻度を基準に語彙リストも作成した。2 年生のカリキュラムが BECC の新しい教員や学生に使いやすいものになるように、教員用と学生用にユニットの紹介を作成した。2 年生の英語カリキュラムの開発デザイナー、またコーディネーターとしての役割の一環として、リーはジーン、ジャック、ヘーミッシュと協力して定期的にミーティングを開いて教材のデザインを議論し、期限を決め、教材に対するフィードバックを提供した。

その他のカリキュラムのデザインに関しては、リーは 1 年生の英語用オリエンテーション・ユニットの見直しに参加し、改訂されたユニットのために 3 つの新しいレッスンを制作した。さらに 1 年生の英語の各ユニット用の語彙リストを作成し、日本ユニットと旅行ユニットの語彙テストを作成した。学習者のニーズに応じていくように、1 年を通して、彼女は 1 年生の英語カリキュラムのレッスンを体系立てて修正していった。またジャックとヘーミッシュと共に、オープンキャンパス・レッスンとそれに伴う教材を作成した。また、新しいスピーキングテスト用の質問と一連の質問セットの作成にも加わった。

今年、リーは学生の語彙のレベルを評価すると共に 1 年生の英語カリキュラムに含まれる語彙レベルに関する調査を行った。調査内容は 1 年生の英語カリキュラムに含まれる語彙の範囲と頻度の分析、及び 1 年生 249 名を対象にした語彙レベルの評価である。調査の結果と 1 年生の英語カリキュラムの実用的なかかわり合いは広島文教女子大学ワーキングペーパー誌に彼女の調査報告書として記載された。調査の一環として、リーは **Research Institute of Language Studies Language Education** 誌に調査報告書を掲載したが、その内容は神田外語大学のインターネットによるコース・マネージメント・システムを使った仕事の詳述である。

リーは 2009 年 2 月のカンボジア TESOL 会議で第 2 外国語によるライティングにおける自主モニターの調査結果を発表することになっている。また、東京で開催された 2008 年度の JALT 会議で、"Working Towards a Total Learning Environment (邦題：トータ

ルな学習環境を目指して) "というタイトルによるポスター・プレゼンテーションに参加した。

f. 小館梓

小館は、文教の学生のニーズと語学能力を考慮しながら、KUIS の SALC のオリジナル教材を応用しつつ、SALC の映画で学習課程のための一般的な教材を開発した。現在、課程には 2ヶ国語による学習戦略シートが 8 枚あり、学生に映画を使った英語学習の方法を提供している。

彼女は JALT の北海道と東京での会議で教材に関する発表を行った。さらに、教材の正当性と使いやすさに関する調査も行われた。これらの一般的な教材を使用して、学習者のコミュニケーション語学学習と自主学習への意識を高める可能性があるという結果が得られた。その結果について 2 月のカンボジアでの TESOL 会議で発表することになっている。また、彼女の論文、“Fostering Learners’ Motivation towards Language Learning – Theories and Practices” (邦題：語学学習への意欲を高める、その理論と実践) は、Kanda Gaigo Group Journal “Interactive” 誌 Vol.26 号に出版された。

彼女は、ケイレブと共同で、音楽を使った学習に焦点を当てた一連の新しい教材を完成したばかりである。

3. 2009 年度の BECC 研究計画要約

(各教員がそれぞれに提出)

a. ジーン・トンプソン

2009 年度には、ジーンは香港で 6 月に開かれる自立学習学会国際大会のワークショップで、BECC のカリキュラムに自主学習を組み入れる過程に関する発表を行う (BECC チームのメンバーとして) 予定である。現在は、BECC のコース評価課程、特に、実効的な “PDCA サイクル” をコースの評価と開発にどのように実施するか、という論点に関する調査企画に取り組むことを考えている。

b. ケイレブ・フォール

ケイレブは 2009 年オーストラリア、ブリスベーンの QUT (クイーンズランド工科大学) での博士課程に入学し、自主学習に関する調査に取り組んでいる。彼は 2009 年 6 月に香港で開催される自立学習学会国際大会で小館梓と共に「学習された無力感」という人間の心理に関する発表をする予定である。

c. ヘーミッシュ・ギリーズ

来年度の調査計画として、ヘーミッシュは教室内外の双方における語学学習のフロー体験を考えている。これは心理学者のチクセントミハイ教授が打ち立てた幸福を表現する概念で、語学学習の場においてテストされ始めたのはごく最近のことである。

ヘーミッシュはまた、6 月香港で開催される ILA 会議で BECC のワークショップをアシストする計画である。最後に、2009 年度の新入生を対象に、4 月から 2 つの調査を行う予定である。

d. ジャック・バウワー

来年度ジャックは文教の学生がライティングの課題にオンライン機械翻訳をどのように使用しているかという調査を行う予定である。また、BECC において語彙が選択される過程と教室で学生が学んでいく過程、及び英語の授業で使用する語彙テストの代替フォーマットを調査する計画である。2008/9 学年度の学生からのフィードバックでは、この 1 年間で語彙が増えたと感じていないと回答した学生は 45% であり、この分野は調査に値する。ジャックは JALT CALL で学生がオンライン機械翻訳を使用しているかどうかに関する発表をすると申請し、また 8 月にバンコックで開催される教育における辞書会議で、

ブライアン・マクミランと共同で学生が電子辞書をどのように使用しているかに関する発表をする旨の申請を出す予定である。

e. リー・アトキンソン

2009/2010 学年度、リーは 2009 年 6 月香港で開催される自立学習学会国際大会で二つの論文を発表する予定だが、内容は教室における学習者の責任と内省や感想を高める彼女の調査報告となる。同じ大会で自立的学習活動を BECC カリキュラムに組み込む点に関する詳細をワークショップで共同発表をする。

さらに、BECC で 2 年生の英語カリキュラムをデザインし作成した経験を年代順に記した研究論文を書き上げる希望を持っている。今年着手した研究をさらに深めるために、リーは来年、語彙用フラッシュカードとノートブックを 1 年生の英語カリキュラムに組み込む研究を考慮している。

g. 小館梓

小館は 2008 年に KUIS で取り組んでいたラーニングアドバイザーのプロの開発プログラムの調査企画を再開する予定である。現在 KUIS の 6 人のラーニングアドバイザーを対象にしたインタビュー原稿の分析に着手し、アドバイザーたちの訓練のチャンスと職業に対する認識、さらに職業上の知識を維持、管理して、その他の教育機関でキャリアアップにつなげ、拡大するチャンスを求める方法、などを調べる段階に入っている。彼女は 2009 年香港で開催される自立学習学会国際大会で、その研究を発表する予定である。

E. 2009 年度の計画

1. 授業スケジュール

このセクションの目的は 2008/2009 学年度に BECC の教員及びラーニングアドバイザーチームの各メンバーが行った調査と教材活動を概観することである。

真新しいセンター、カリキュラム、そして SALC を目の前にして、本学年度の主題は教材のデザインと作成であった。2008/2009 年度に教員は教材のデザインと広報活動のために週 2 コマが当てられ（すなわち、コンタクト・コマは週 6 コマのみ）で、前期には SALC ラウンジでの担当業務はなく、カリキュラムと教材開発に多大なエネルギーを注ぐことが出来た。

英語コミュニケーション 1/2 と 英語ワークショップ 1/2 (1 年生の英語)

月 1/木 1 (栄養/言語)	月 4/木 4 (福祉/心理)	火 1/金 1 (初教)
FE1 ヘーミッシュ・ギリース	FE5 ジャック・パウワー	FE9 ジーン・トンプソン
FE2 エヴァン・ジョーンズ	FE6 ヘーミッシュ・ギリース	FE10 リー・アトキンソン
FE3 リー・アトキンソン	FE7 ブライアン・マクミラン	FE11 エヴァン・ジョーンズ
FE4 ジャック・パウワー	FE8 エヴァン・ジョーンズ	FE12 ブライアン・マクミラン

英語コミュニケーション 3/4 と 英語ワークショップ 3/4 (2 年生の英語)

月 2/木 2 (福祉/心理/栄養)	火 2/金 2 (言語/初教)
SE1 ブライアン・マクミラン	SE6 リー・アトキンソン
SE2 エヴァン・ジョーンズ	SE7 ジーン・トンプソン
SE3 ケイレブ・フォール	SE8 ヘーミッシュ・ギリース
SE4 リー・アトキンソン	SE9 ジャック・パウワー
SE5 ヘーミッシュ・ギリース	SE10 ブライアン・マクミラン

英語基礎演習 1/2 (自立学習)

月 4/火 4	ルーク・カーソン ケイレブ・フォール 小館梓
---------	------------------------

2. 教材デザイン担当

“1年生の英語”/“2年生の英語” 教材開発	リー・アトキンソン(リーダー) エヴァン・ジョーンズ
“ジュニア” 英語 教材開発	ヘーミッシュ・ギリース(リーダー) ブライアン・マクミラン
語学部“自立学習” 教材開発	ルーク・カーソン 小館梓
語学部“メディア報道の英語” 教材開発	ジャック・パウワー
SALC カリキュラム統合 教材開発	ケイレブ・フォール 小館梓

F. 総論

文教イングリッシュ・コミュニケーション・センター (BECC) は 2008 年 4 月に開設 (授業とカリキュラム企画) され、同年 9 月に文教 SALC が開設された。本報告書は、SALC とカリキュラムが達成したこと、またその鍵となるデータを簡単に概観し、解釈して、成功をもたらした要因を探るとともに、2009/2010 学年度に注意を喚起すべき側面を考察するために書かれたものである。

センター開設前の準備期間が非常に短かったこと、大量のカリキュラムと SALC 教材の開発が要求されたこと、さらに KUIS 教育から HBJD 教育への移行に伴って、大きく異なる学習者に対応してきたことを考えると、我々は大きな成功を成し遂げたと思う。

課題は残っている。カリキュラムの効率を高めること、特に情報の伝達と学生の満足度を総合的に高めることが 2009/2010 年度の BECC カリキュラムの重要な目標となる。SALC に関しては、好調なスタートを切った SALC サービスの勢いを盛り上げ、さらに自立性の高い利用を奨励することが重要な目標となるだろう。優れた教材デザイナーと研究者のチームに、2009 年度には 3 名の新規スタッフが加わることになり、企画開発の研究に向けてさらなる邁進が強く望まれるところである。

結論として、2008/2009 学年度は創造と建設の年であった。2009/2010 年度は団結、発展、そして、より高度なレベルへの飛躍の年となるであろうと期待される。

ケイレブ・フォール
BECC SALC ディレクター

ジーン・トンプソン
BECC カリキュラム・ディレクター

2009 年 2 月 6 日